

普及手段としての地域(部族)言語 と公用語

山 内 耕 二

1. はじめに

アフリカには部族の数とほぼ重なる 800 種ほどの言語があると言われてい
る。この言に従えば、52 部族によって構成されているとされるケニア国内で
はほぼそれに等しい数の言語が用いられていることになる。

ケニア社会林業訓練プロジェクトがサブプロジェクトを展開しているキツイ
県は東部州に属し、主としてカンバ族の居住する地域である(図-1)。すなわ
ち、日常的にはカンバ語が通用しているところだと考えられるが、公用語であ
る英語、スワヒリ語との関係はどうなっているのだろうか。林業普及の効果的
な実行を確保するためには、どうしても把握しておきたい課題である。

このことに関し、三種類の言語で印刷したパンフレットを用いて予備的な調
査を実施し、若干の知見を得たので報告する。

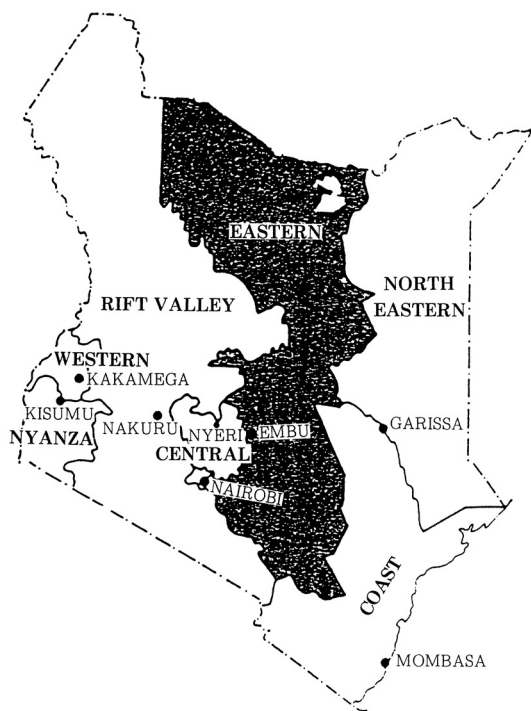
2. キツイのカンバ族

「昔々、ケニアの奥深くに 4 人の息子を持ったおじいさんが住んでいました。
おじいさんは自分の死の近いことを悟ると、それぞれの息子に宝物を分け与え
ました。ヤリを与えられた息子はマサイ族すなわち牛飼いになり、クワをもら
った息子はキクユ族すなわち百姓になりました。ハチの巣箱を受け取った息子
はオキエク族すなわち養蜂を生業とし、矢筒を譲られた息子はカンバ族すな
わち狩りを主業とすることになりました。」という伝承は別にしても、カンバ族
は狩猟者およびコーストと内陸を行き来する商人として知られている。

彼等は、カタンガ(コンゴの森林地帯)に起源をもち、タンザニアのニヤム

YAMAUCHI, Koji: Tribal Dialects and Official Languages as a Tool for
Extension

日ヶ社会林業訓練計画プロジェクト



凡例

--- 国境

— 州境

--- 県境

◎ 州庁所在地

● 州庁所在地(上図)

● 県庁所在地(下図)

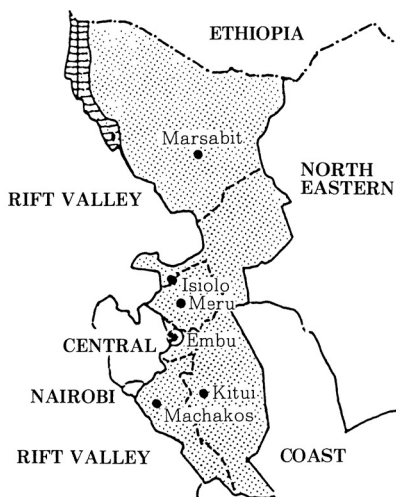


図-1 ケニアの各州(上図)と東部州(上図の黒塗り部分; 下図の網かけ部分)

ウェジランドを経てキリマンジャロ近くのウカムビに住みついたが、人口の増加にともなってここからタイタヒルやキュルルへ進出し、マチャコスのムボニに定住するようになり、カングンド、ヤッタそしてキツイへと生活圏を広げていったとされている。

3. 公用語と日常語

先述したように、ケニアでは英語及びスワヒリ語が公用語とされている。このためか、普及活動の拠点であるクワボンザ・ロケーション（Location 最小部落単位）の小学校でも全ての科目が英語で授業されるうえに、第1学年から最終第8学年まで、一週間に6時限（1時限は35分間）が英語教育に費やされ、スワヒリ語にも同じく第1学年から第8学年まで毎週6時限が保証されている。

一方、カンバ語教育には毎日1時限、1週間で5時限の授業が確保されているが履修期間は第1学年から第3学年までの3か年に限られている。

このような語学教育環境にありながらも、児童・生徒の日常生活はカンバ語によって進行しているというのが実態である。

4. 苗木の無償配布とパンフレット

苗木の無償配布は「苗木の入手が困難なために植樹できないでいる住民へ、優良な苗木を供給することによって、植樹及びその技術を普及する手法を開発する」ことを目的としてプロジェクトのスタートと同時に開始された。その実行経緯は表-1のとおりである。

初回の1987年には学校、教会、農民等に適宜配られたが、1988年にはクワ

表-1 苗木の無償配布実行経緯

西暦	配布本数	樹種数	箇所数	摘	要
'87	65 千本	40	—	学校、教会、農民等に適宜配布	
'88	105	40	6	ロケーションチーフと協力して農民等に配布	
'89	129	—	10	林業普及員・ロケーションチーフと連携、「ロケーション植樹デー」を開始、全住民が配布対象	
'90	52	44	10	「植樹デー」	〃
'91	93	36	10	「 〃 」	〃
'92	100	32	10	「 〃 」, パンフレット配布,	〃

ボンザ郡のクワボンザ・ロケーションを含む6ロケーションで各ロケーションチーフ（部落長）等の協力を得ながら、農民を主な対象として計画的に実行された。

1989年からは毎年10か所で、キツイ県の林業普及員や各ロケーションチーフと連携をとって「ロケーション植樹デー」を設け、全住民を対象に組織的に実行している。

苗木配布当日には付近の住民や小・中学生を大勢集め、「植樹デー」の趣旨や苗木の取扱い・植樹方法を説明すると共に、植樹作業の実際をデモンストレーションしたり、参加者による記念植樹などを行なっている。

この間、1989年に英語とスワヒリ語で植樹方法を説明したパンフレットが用意されたが、配布枚数等の詳細については報告されていない。

1992年の各地域の「植樹デー」に当たり、英語版、スワヒリ語版、およびカンバ語版のパンフレット（写真-1）を作成し、苗木と並行して配布した。

配布にあたっては、①植樹方法を解説したパンフレットである ②参加者にとって最も理解されやすい言語は何であるかを調査する ③一人必ず一枚しか受け取れない ④パンフレットを必要とする人は係員に申し出るなどを事前に説明して、一人一人に手渡した。また、11月3日（初日）を除き各会



写真-1 植樹方法のパンフレット
（左から英語、スワヒリ語、カンバ語版）

場には、各版それぞれ 150 部づつを用意した。配布結果は表-2 に示す通りである。

5. 考 察

今回、調査を実施したキツイ県のクワボンザ郡とセントラル郡に含まれる各ロケーションは、① 1960 年代から入植の始まった比較的新しい土地であるこ

と ② ケニアの独立そのものが 1963 年の 12 月であること、そして ③ 主たる配布対象が農家の婦人であったこと等を考えれば、図-3 に示されたカンバ語 43.2%，英語 28.5%，スワヒリ語 28.3% の構成は容易に理解できる。

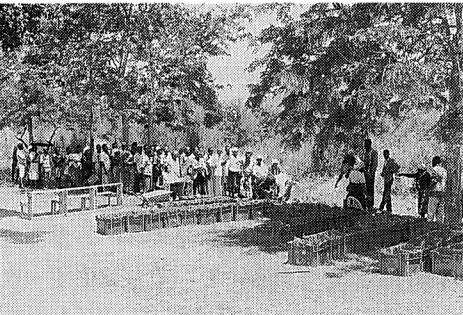


写真-2 植樹デーの苗木の配布を受ける部落民

すなわち、先行する伝統のコミュニティ言語に、新参の二つの公用語が競って追いつがっ

表-2 パンフレット配布結果一覧表

会場 番号	ロケーション	参加者数	パンフレット配布枚数			
			英	語	カンバ語	スワヒリ語
①	カニアング	400	36		185	92
②	ムトングニ	300	106		111	62
③	ミアムバニ	150	20		48	41
④	キサシ	350	58		150	100
⑤	ムランゴ	200	38		64	13
⑥	ンザンバニ	400	80		131	115
⑦	マテニアニ	200	34		79	60
⑧	カンゲジア	350	142		94	22
⑨	クワボンザ	？	150		150	150
⑩	キュシアニ	400	88		126	91
2,750+			752		1,138	746

* ③ のミアムバニではひどい降雨に見舞われて十分な配布ができなかった。

* ⑨ のクワボンザでは参加者の把握をしなかった。

ている状況だと考えることができる。

それ故に十分な公用語教育を受けた小中学生あるいは青壮年層に調査対象を移せばかなり違った結果が得られる可能性も示唆される。

このことに関連し、各ロケーション毎に、配布した三種類のパンフレットの構成を検討してみると図-3 になる。

どのロケーションにおいてもカンバ語が比較的安定して優位（33%～59%）を占めており、英語とスワヒリ語はそれぞれ11～56%、9～38%とロケーションによ

って大きな差があら
われている。

英語とスワヒリ語
の比較では、英語優
位が3ロケーション
（②⑤⑧）、スワヒ
リ語優位が5ロケー
ション（①③④⑦
⑨⑥）、ほとんど優劣
が無いが2ロケーシ
ョン（⑨⑩）となる
が、絶対数ではそれ
ぞれ752と746（表-

2）でほんの僅かではあるが英語優位となっている。

さらに注目しなければならないのは、いずれのパンフレットも受け取らなかった人が各ロケーションに20～100人近くいる（表-2）という事である。このことから、会話はできても識字できない人々の存在が十分に推量できる。

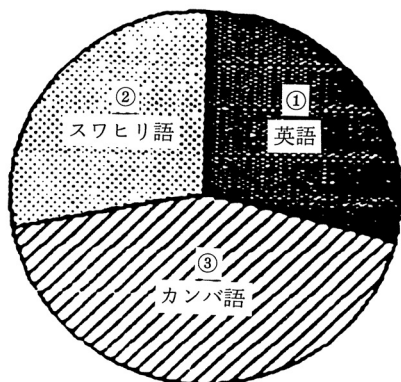


図-2 パンフレットの配布総数の構成比
① 英語 ② スワヒリ語 ③ カンバ語

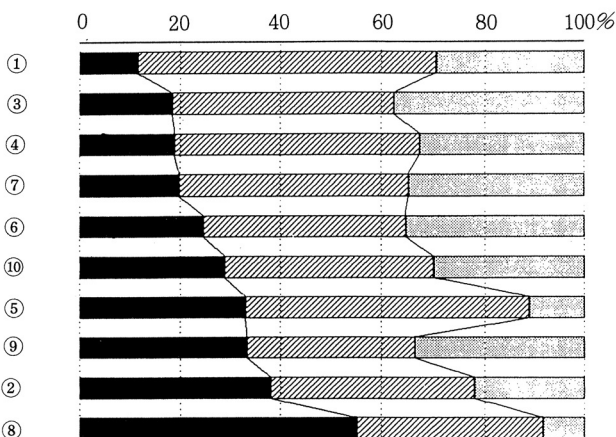


図-3 ロケーション別構成

■ 英語 ▨ カンバ語 □ スワヒリ語

6. おわりに

今回の調査ではっきりしたことは「公用語を用いれば足りる」とする考えの誤りであり、特に農山村を舞台として繰りひろげられる林業の普及にあっては、普及客体に適合した情報伝達手段としての言語の選択が望まれるということである。当然のことながら、識字できない客体のためには音声や映像を用いた普及手法も開発されるべきである。

公用語とコミュニティ言語との入れ替わり、すなわち公用語は地域住民の日常生活用言語となりえるのか、十分に公用語教育を受けた若年層を調査対象にすればどうなるのか、ロケーションによる公用語の浸透度の違いは入植時期の早晚によるのか、教育水準の高低に起因するのか、それとも主要道路・マーケットなどからのアクセスの難易に基づくのか、興味の尽きないところである。

キツイ県の住民が一本でも多くの木を植え、育て、それが彼らの経済・社会的立場の向上に結び付くような、そのような林業の普及、それを可能にする普及方法の開発をやってみたいと夢想している。

報告の終わりに当たり、パンフレットの作成には訓練担当の小川慎司、加藤和久両専門家と加藤陽子さんに多大のご協力をいただいたことを記して謝意を表します。

〔参考文献〕 1) “Primary Geography, History and Civics” Pupils’ Book for Standard Five, Kenya Institute of Education 2) “GHC Pupils’ Book 4” Our Province Eastern, Kenya Institute of Education (1992. 11. 28)

— お 詫 び —

1993年1月刊 No. 26 の英文目次および p. 13 の英文表題の Myanmar の r が欠落していました。お詫びして訂正します。また、井上千恵子氏の報文中 p. 63 の写真-2-②, ③ が本文中ではそれぞれ写真-3, 4 となっていました。コルク剥皮作業を分かり易くするため写真-2 の ①～③ として並べかえた際、本文中の番号を訂正しませんでした。お詫びして訂正します。